



第 9 号

2018年
6月25日発行

大学院時代の思い出

小田切 文洋

私が国文専攻の博士課程を修了したのは約四十年前のことでした。修士課程まで他大学に在籍していた私の指導教授になっていたいたのは、鈴木知太郎先生でした。鈴木先生は、池田亀鑑が中心となつて進められた『校異源氏物語』の編集に参加されて学問の基礎を作られたと聞いています。『校異源氏物語』は、現在『源氏物語大成』として『源氏物語』研究の出発点になっていきます。私が学んでいたときには、外部講師として鈴木先生とともに『校異源氏物語』の編集に加わられた松尾聰先生が来られていました。散逸物語研究の基礎となる『平安時代物語の研究』で知られる松尾先生ですが、教え子の三島由紀夫が「逐条主義的な講義」と書いているように、字義を用例の帰納から導く厳格な解釈法の一端に授業で触れることができました。鈴木先生の交遊は広く、一年間でしたが阿部秋生先生の講義も受けることができました。『源氏物語』の別本系統の再考を促した『源氏物語の本文』(一九八六年)の研究をお進めになっていた時期だったかと思いますが、本文校異の重要さを教わった記憶があります。

博士課程ですからあまり授業に出る必要はありませんでしたが、鈴

木先生に受講を勧められたのは岸上慎二先生でした。ご存じの方も多いと思いますが、鈴木先生とともに今の国文学科の礎を作られた方です。岸上先生は『清少納言伝記攷』(一九四三年)などの著作で『枕草子』研究を大きく前進させました。辻堂の先生のお住まいを訪ねたことがありますが、招かれて玄関に入った時、まず驚かされたのは志賀直哉の全集が並んでいたことです。さらに書庫も見せていただきましたが、貴重な写本のご架蔵も記憶に残っておりますが、それ以上に印象深かったのは書架に『定本柳田國男集』が並んでいたことです。厳密な書誌学的研究が先生の学問だと思っていましたので意外な思いでしたが、考えてみれば「めでたし」などの一つの言葉から『枕草子』の本質に迫る論文を先生が書かれているのはこのような柔軟な発想からだと思いました。

修士論文の指導教授は当時國學院大学の学長を務められていた佐藤謙三先生でしたが、『群書類従』を説破したという伝説の持ち主でした。当時の國學院の語学教師には、詩人の安東次男や小説家の丸谷才一のような毛色の変わった教師が代々勤めていました。それらの先生方を招かれたのは佐藤先生でした。佐藤先生のお通夜に丸谷才一が駆けつけていたことを今でも憶えています。

今日の日本文学の研究はどの分野でもそうだと思いますが細分化が進んでいます。短期間での成果も求められるようになっていきます。なかなか専門の研究とともに違う分野の勉強をする条件も少なくなっていると思います。大学院の修学時代に懐の深い先生方に教えていただいたことはその後の教員人生を考えてみても深く感謝をしています。

〔国際関係学部教員〕

OB・OGだより

共に生きる―手話を学ぶ―

鹿野 しのぶ

大学卒業後、教育・古典研究に携わってきたが、この間、医療や介護の現場に直面することも多く、そうした中で手話を学ぶ機会を得た。最初は初級講習会に出席し、クリスマスにはろう者との交流会に参加した。交流会では次のプログラムに移る際、講師が部屋の電気を消したり付いたりする。これは注意喚起の時に用いる合図で、ろう文化の一つである。最後に参加者全員で「赤鼻のトナカイ」を手話で歌った。ろう者と聴者の垣根を越え、充実した時間を過ごすことができた。

手話表現の一つに五十音を一文字ずつ指で表す指文字がある。初級受講者は手話の単語表現が分からない場合、この指文字を使って講師（ろう者）に質問し、適切な手話を教えてもらう。こうして単語を増やしていくのだが、指文字で表現しても伝わらない時もある。それは聴者の生活にある表現

が、必ずしもろう者の生活にあるとは限らないからだ。だからこそ相手の生活・文化に対するより深い理解が求められる。

手話といっても、顔の表情で意思を伝える非手指動作もあるので、相手の目・顔を見て会話することがとても大切なことになる。また、手話は視覚言語であるから、周囲の音の影響を受けずに会話が成り立つという利点・魅力もある。

今後は、手話の能力に磨きをかけながら、読み聞かせボランティアに参加したい。できることならば、古典文学作品を取り上げることがささやかな夢である。

[平成5年国文学科卒業]

私と『源氏物語』

館入 靖枝

現役での大学受験に失敗した私は、専門学校に入学したのですが、奇しくもその学校の入学式と同じ日に、すぐ側で日本大学の入学式が行われていたのを目にし、失意ゆえ涙したのを覚えています。高校時代から古典文学がとても好きで、大学に入れたら、卒論は『源氏物語』にしよう、などと

漠然と考えていました。

それから、就職、結婚、出産を経て、子育てが一段落する頃、再び学びたい気持ちが芽生え、通信教育部に入学したのです。もちろん専攻は国文学。必死でレポートに取り組み、スクーリングは先生の言葉を一言一句漏らさない意気込みで受講しました。一生の内であればどこ勉強したことは無く、あの四年間は私の誇りとなっています。

晴れて『源氏物語』で書いた卒論を、指導教授の阿部先生が認めてくださり、コンバクトに書き直したものが『語文』に掲載されました。その後すっかり調子に乗り、先生の勉強会に参加させて頂き、約十五年、今も続いております。その間、二本だけですが、論文も書きました。

千年を超える物語が、どれだけ数多の人の気持ちを奪い、バイブルとなってきたことか……。読めば読むほど物語に包まれ、生きる指針にもなる。この物語は、ある意味で経文に似た力を帯びていると信じていません。

もしかしたら、私は『源氏物語』の力で、日大に呼ばれたのではないかしら、とさえ思うほど、強い縁を感じています。

[平成15年文学専攻（国文学）卒業]

わたしの仕事

中学校長から新聞社へ



東京都の教員採用試験の論文の書き出しに、「不來方のお城の草に寝ころびて空に吸われし十五の心」という石川啄木の短歌を書いた。将来に大きな夢を描くことのできる子どもたちを育てたい、と教職への思いを抱いていた私であった。専門教科の問題には、前日なげなく手にした『紫式部日記』からの出題があった。運とはこのようなものかと思う。この幸運に恵まれ、東京都教育委員会に、中学校国語科教員として採用された。

38年間の教員生活を支えてきた。国語科教育指導法の研究をした教論の時代、国語を専門とする指導主事として教育行政にたずさわった時代、新しい学校づくりのために（最後の勤務校はコミュニティ・スクール）、校長として、教職員・生徒たちと共に歩んだ時代……ここには「出会い」というキーワードがある。「そのときの出会いが人生を根底から変えることがある」（相田みつを）。

昨年4月、私は新聞社と出会った。読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局・アドバイザーとしての職責がある。職種が異なるということとは、これほど刺激的なものと、良くも悪くも、日々発見の連続。働き方のしくみも全く違う。新たな世界を知り、視野がまた広がった。

私は今、「教育の世界」と「新聞社の世界」をつなぐ仕事をしている。これまで、「出会いが子どもたちを育てる」を教育の柱として、新聞を積極的に活用してきた。それは、新聞には「人」が書かれているからである。どのようなジャンルであれ、記事になる事柄は、「人」が見たことである。人とかかわりがあることが、新聞には書かれている。身近な地域・日本そして世界中のいろいろな人たちに会えるのが新聞。これからの

時代は、答えのない課題に対して、どのように立ち向かっていくかが問われる。子どもたちには「人」を見つめ、そこで出会う人々から生き方や考え方を学び、社会を正しく見極め、自分の頭でしっかりと判断できる人間になってほしいと考えている。それが民主主義を支える力になる。

新聞には、子どもたちを育てる力がある。「新聞を知り、新聞で学ぶ」ことの意味や方法を、大学の教職課程での授業、小・中・高校の先生方の研修などで伝えることが、私の仕事である。一つの記事には、何人もの人のチェックが加わり、新聞が届くまでには何千という人の手がかかっている。だから、情報の信頼性は、やはり高いのである。様々なメディアの一つとして、「新聞の力」を伝えること、これが私のセカンドライフになった。皆さん、読売新聞紙上で、時々、お目にかかりましょう。

秋山（阿部）純子 昭和53年3月、国文学科卒業。卒業論文は「漱石が描いた女性像―三部作を中心に」。東京都の中学校国語科教諭、指導主事、校長を経て、平成27年3月退職。現職は、読売新聞東京本社社長直属教育ネットワーク事務局アドバイザー。趣味は料理。ピアノのレッスンを再開する予定。

追悼

笠原伸夫先生

平成29年11月8日逝去

冥暗に向かつて

佐藤 健一

理系の浪人生から国文学科に紛れ込んだ私は何をすることが分らず教室に出ないで月刊文芸雑誌を購読して閉じこもった。単位は友人がとってくれて二年生に復学できたとき近代文学の大学教員はみな文芸評論家だと思ひ込んでいた。笠原伸夫の名前を時間割で見て『地獄論』と『虚構と情念』をその順で読み、次の年に先生の近代文学演習を受講した。あれから四十五年ほど経つのだ。

忘れられない先生の言葉がいくつか浮かぶ。『批判されて負った顔の傷は名誉の傷跡』という言葉は繰り返し聞いた。中学教師時代に試験中の教壇で原稿を書いた。毎日欠かさず文章を書く、たとえ飲酒した帰宅後でも原稿用紙に向かう、透明な文体が理想、作家と作品は地続きではないこと等など、今もこのころ私はかつこいと思った。当時、伝記研究と作品研究との関係が「復学」した幼い私の抱えた難問だった。

修士二年のいつだったか、笠原先生が学部の授業に誘ってくださいました。茂吉『あらたま』所収の「ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蛭を追ひつめにけり」一首を、伝記的研究・

新批評・現象学・解釈学等の方法的アプローチで分析する内容だった。入会したばかりの学会で批評と研究の接点をめぐるシンポジウムを聞き度肝を抜かれた私はまよい子となっていた。迷子の私に、論証の方法は選択的に採るべき意匠と考へ今更迷うな、併せて論証不十分な方法的意匠を見抜いてみずから打開せよと勇気を与えてくださったのだと思う。

笠原先生の情念論はロマン派のだった。それは初期の中世論に由来する近代的知性が照らし出す冥暗であり、創造する理性にとつてもはや回帰不能な母胎の表象ともなる私は理解した。笠原先生はみだりに自己を語らず、または語るに度しやかだった。退職後は夫婦で介護医療付き住宅に移り住み何かあつても連絡しないが悪く思わないでとおっしゃった。笠原伸夫先生のご冥福をお祈りします。

〔元商学部教員〕

「わが人生に悔いなし」

森井 マスミ

笠原先生のことを思い出す時、先生はいつもの爽やかな声で、少し控えめにはにかむように笑っていらつしやる。早熟な文学青年で、三島由紀夫も加わっていた同人誌に最少で参加していた時のお話を伺ったこともある。あまりにさりげなくお話しなさるので、驚いたり質問したりするのも憚られ、今から思えばもっとお伺いしておけばよかったと思うことが沢山ある。

修士課程で歌人の塚本邦雄に師事し、論文は泉鏡花で書いたものの、博士課程がないため日本大学を受験することになった。高校生の時に鏡花の魅力を識り、先生の御論文も繰り返し読んでいたので直接御指導頂けることは夢のようだった。金沢旅行や神保町散策など御一緒頂いたのも楽しい思い出だ。先生が短歌をなさっていたことは、羞かしながら後から知った。「塚本さんから丁寧なお手紙を頂きましたよ」と伺った時には、前衛短歌全盛期のお二人の姿を思い身が引き締まった。評論家の菱川善夫先生の研究会に参加することになった時には、今度は「笠原さんから丁寧なお手紙を頂いてね」と伺い、再び師のありがたさをかみしめた。塚本作品の「辞」をめぐる笠原・菱川論争は短歌史に残る一大事件だ。いつも穏やかな先生だが、文章からは高潔さと情熱がひしひしと伝わってくる。

最近はお便りのお返事がなく、気になっていたものの、御病氣ならお目にかかるのはかえってお望みではないだろうとお電話を控えていた。亡くなられたのを知ったのは随分あとで、紅野先生がメールでお知らせくださった。驚いてほんやりしたまま奥様にお電話した。泣き出してしまったところ、寿様は「泣かないでいいのよ。わが人生に悔いなしと申しておりました」とやさしく声をかけて下さった。まさに先生らしいお言葉だ。さらに胸が熱くなった。清々しいその人生に、残された者の心も幸せで満たされる思いがする。笠原先生、本当にありがとうございます。

〔愛知淑徳大学教員〕

キャンパス点描

新装になった書道教室

1号館2階西側の大教室が、大改修の後、平成29年4月に新しい書道教室として、よみがえった。改修前は、生物学教室として

使用されていた。

これまで書道教室は、1号館の正面入口右側に位置する部屋が使用されてきた。しかし、実習教室としては狭小で、履修希望者すべての学生を収容する余裕がなかった。おまけに書道文房用具を収容するスペースも狭く、また洗浄設備である水道の蛇口は3本しかなかった。それが今回12本に増設され、片づけ時間は大幅に短縮された。



新装書道教室での授業風景



特注の広い机での実技風景



真新しいステンレスの水場



久米ゼミ

(久米依子先生担当)

月曜5限



—2018年4月9日 第1回ゼミ—

久米ゼミは、近現代文学研究のゼミです。近現代の純文学からSF、児童文学、ライトノベル出身作家まで、幅広く研究していきます。三年次で、四年生のゼミ発表を補助しながら研究対象を決め、四年次では就活

と併行しながら卒論制作に取り組みます。

以下、現四年生の感想です。▼「ゼミ生みんな仲が良くてすごく居心地が良いです。先生も親切で、卒論で悩むと親身になって相談に乗ってくれます」U・M ▼「明るくて優しい人が多いです。自分たちがやりたいことが出来るので、自由に論じられます。季節ごとには先生からお菓子のプレゼントもあります」H・H ▼「とても雰囲気の良いゼミです。三年生の前期では先輩と組んで発表の手伝いをし、そこでどのように進めていけば良いか学ぶ事が出来ました」N・A ▼「飲み会や文学散歩など、ゼミ生同士の交流の場が多くあり、和気藹々としたゼミです。先生はどんな些細なことでも相談に来て良いと言ってくでさるので、安心して研究ができます」O・H ▼「三年生は後期に単独での発表がありますが、事前に先生との打ち合せでアドバイスをもらえるので、心配いりません。またお菓子が配られたりパフェを食べたりと甘いもの好きにはたまらないゼミです」I・K ▼「ゼミ生同士の仲が良いので、毎週楽しいです。秋には文学散歩に行つて、知識を深めつつ、みんなと遊びました」A・Y ▼「去年の文学散歩は鎌倉文学館で鎌倉ゆかりの文学

者について学んだ後、由比ヶ浜で遊んだり、鶴岡八幡宮に参拝しました。お昼のしらす丼がとっても美味しかったです！」S・N ▼「10月の文学散歩は、文学の歴史に触れつつ、かき氷やケーキなど美味しいものもたくさん食べ、楽しい思い出ができました。」T・M。
……なんか、食べ物のお話ばかりだな(汗)。
ともかく、皆で力を合わせて卒論完成まで、頑張っています！
(久米依子)



—2017年10月8日 文学散歩・鎌倉—

1960年(昭和35年)

1月19日	日米新安全保障条約調印
1月25日	三井三池鉱業所で無期限全面スト
3月31日	伊坂裕次氏助手退職
4月1日	杉谷寿郎氏助手就任
4月30日	ソニーが世界初のトランスステレビ発売
5月24日	チリ地震による大津波が三陸海岸に襲来
5月30日	『語文』第八輯(山田孝雄博士記念号)刊行
6月15日	日米新安保条約阻止のデモ隊が国会突入
6月19日	日米新安保条約が自然承認
6月20日	『語文』第九輯刊行
6月22日	日本大学国文学会総会
7月1日	呉羽化学工業が「クレラップ」発売
7月15日	岸内閣総辞職
7月19日	第1次池田内閣成立
8月1日	森永製菓が「インスタントコーヒー」発売
8月20日	ソ連スポーツニク5号搭乗犬が宇宙から生還
8月25日	ローマオリンピック開催
9月10日	カラーテレビ本放送開始
10月12日	日本社会党浅沼稲次郎委員長が刺殺
11月8日	米大統領選でケネディ氏が当選
11月11日	学術研究発表会
12月27日	池田内閣が「所得倍増計画」閣議決定



森永インスタントコーヒー



ダッコちゃん

自民党 新安保を単独可決



社党、廊下で座りこみ

未明の本会議で

衆院、会期延長も通す

警官実

政

新安保単独可決を伝える『朝日新聞』5月20日付朝刊

警官隊 国会内に入る

国文学科ヒストリー⑨

【国内外の動き】この年の前半は、日米安全保障条約改訂をめぐる、いわゆる「60年安保闘争」により、デモ隊と警官隊との衝突が激化した。しかし、改訂法案は、5月に自民党が単独強行採決し、6月に国会法の規定によって自然承認された。7月、岸内閣が総辞職、池田内閣が成立すると、所得倍増計画が発表され、安全保障から経済重視へと舵がきられた。暮らしの中では、テレビがカラー放送を開始し、受信契約数を飛躍的に伸ばしていたことから、メデイアとしての影響力を強めた。「ダッコちゃん」が大流行し、「インスタントコーヒー」が登場したのも、この年であった。

【学内外の動き】4月1日、芸術学部には放送学科、通信教育部に商学部商業学科が設置された。また、日本大学創立70周年事業として日本大学明誠高等学校が創立された。6月22日に日本大学国文学会総会が開催され、①西鶴の季語・白鳥哲三、②「から」の自由な用法ということ・山田瑩徹、③色彩と文学・伊原昭、④元禄俳諧の文学史的位置・堤博彦、⑤啄木の魅力・岩城之徳の五氏による各研究発表の後、時枝誠氏による「源氏物語東屋の巻における句宮について」と題する講演が行われた。

研究室訪問 一問一答



阿部好臣(中古文学専攻)研究室

- ①好きな音楽ジャンルは何ですか。
演歌(艶歌・怨歌)。昭和歌謡にはまる。
- ②最近買った高価なものは何ですか。
時計GS。75万程。一点豪華というのをやってみたかった。
- ③最近嬉しかったことは何ですか。
初孫の誕生。可愛い女の子です。
- ④思い出に残る学生時代のアルバイトは？
気象協会。局地予報の名人とか、素敵な人がいっぱいいました。
- ⑤8億円のクジに当たったらどうしますか。
物語文学の研究所創設。

掲 示 板

研究室短信

本年3月をもって佐藤至子先生が退職され、この4月から、久保本秀夫先生（中世文学）と高野奈未先生（近世文学）のお二人を専任教員としてお迎えした。

文学部短信

下の写真は前号で落成を伝えた新本館を正面からとらえたものである。手前側が新しい中庭となり、この庭の完成によってキャンパスの風景は大きく変わる。卒業生が訪れたならば間違いなく驚かれるはずだ。



国文学会 大会案内

【日時】6月30日（土）

【会場】文理学部3号館 3407教室

◆開 会（13：30）

◆研究発表（13：40～）

◆講 演（15：50～）

「和本の形態からみる古典作品のジャンル意識について」

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授

佐々木孝浩氏

◆総 会（17：00～）

◆懇 親 会（18：00～）

*講演・研究発表など、どなたでも自由に聴講していただけます（懇親会以外は無料）。研究発表の詳細については国文学科サイトにしてお知らせします。

第6回ホームカミングデー

11月3日（土）開催です。卒業生の皆様のお越しをお待ちしております。詳細は校友会HPにてご確認ください。

同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第 9 号

2018年
6月25日発行

日本大学文学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3・25・40

紅野謙介・鈴木晴彦・竹下義人
国文通信編集委員会

「研究室訪問」のコーナーをスタートさせた。また、「キャンパス点描」は、書道教室の改装移転に焦点をあて、拡大版の扱いとした。◆校正中、アメリカカンファットボール部の反則行為に端を発した諸問題が、マスコミを通じて連日報じられた。大学当局の対応の悪さには失望したが、同時に、本部組織の旧態依然とした構造・体質も露呈したようだ。（義）

編集後記

◆まずは第9号に玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様にご厚く御礼申しあげる。◆元教授の笠原伸夫先生がご逝去された。教え子にあたるお二人に寄稿をお願いした。◆今号から新規連載企画として「研究室訪問」のコーナーをスタートさせた。また、「キャンパス点描」は、書道教室の改装移転に焦点をあて、拡大版の扱いとした。◆校正中、アメリカカンファットボール部の反則行為に端を発した諸問題が、マスコミを通じて連日報じられた。大学当局の対応の悪さには失望したが、同時に、本部組織の旧態依然とした構造・体質も露呈したようだ。（義）

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。

電子メールは国文学科サイトに設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。